

学校における読み聞かせに関する研究レビュー

著者	宮澤 優弥
雑誌名	人文学教育研究
号	42
ページ	25-33
発行年	2015-08-18
その他のタイトル	A literature review of reading aloud in school
URL	http://hdl.handle.net/2241/00126251

学校における読み聞かせに関する研究レビュー

宮澤 優 弥

1. 問題の所在と研究の目的

本研究はこれまでの読み聞かせに関する研究を「学校」という観点から整理し、「学校における読み聞かせがどのように研究されてきたか」を明らかにする。

読み聞かせは「さまざまな年齢を対象に、読み手が聞き手に読書材を読みすすめていくことであり、同時に絵を提示する場合もある」(玉瀬, 2012, p. 10) 行為である。読み聞かせと聞いてまず思い浮かぶのは、家庭や幼稚園、保育園における乳幼児や未就学児に対する実践だろう。それらの場所では日常的に読み聞かせ実践が行われている。一方で読み聞かせは、学校において学齢期の児童を対象としても同様に実践されており、学校における一般的な教育活動となっている。

国内における読み聞かせ研究を整理し検討したものに玉瀬(2012)がある。玉瀬は読み聞かせ研究を「保育の教育における読み聞かせ研究」「国語教育における読み聞かせ研究」「心理学的研究における読み聞かせ研究」に区分し、それぞれを整理し検討した。この研究レビューは、読み聞かせを複数の学問領域や読み聞かせが行われる特定の状況に着目し、概観したという点で大変意義深いものである。この中で、玉瀬は国語教育における読み聞かせ研究を「『学校』という特定の状況において就学児童を対象とし、読み聞かせは読書指導の一つとして位置づけられ」(玉瀬, 2012, p. 10) るものだとした。すなわち、玉瀬は「学校」という状況の中の、さらに特定の「国語教育³⁾」という状況に絞ってレビューを行ったのである。

しかし、「学校」という特定の状況に目を向けてみると、必ずしも読み聞かせは「国語教育」という状況だけで行われているものではない。実際には、国語教育以外でも読み聞かせは行われている。読み聞かせを「国語教育」という状況だけではなく、「学校」という状況から研究することが必要である。しかし、「学校」という状況に着目して、複数の学問領域をまたいで読み聞かせ研究を整理し検討したものはない。

以上のような問題から、本研究は、「学校」という特定の状況における読み聞かせ、つまり「学校における読み聞かせ」に着目する。そして「学校における読み聞かせ」はどのように研究されてきたのか、文献を整理し、検討し、考察することとする。

2. 方法

目的を達成するために、まず「学校」と「読み聞かせ」が具体的に何を示すのかを明らかにする必要がある。本稿では、「学校」を小学校・中学校に限定する。そして、「読み聞かせ」は玉瀬(2012)を参考として「さまざまな年齢を対象に、読み手が聞き手に絵本を読み進めていく行為」

とする。つまり、「小学校と中学校における、絵本を読書材とした読み聞かせを対象として検証した研究」を対象にレビューを行うこととする。本研究で主として扱う文献は、学術誌に掲載された研究、あるいはそれを基とした学術書に限定した。なぜなら、学校における読み聞かせを扱う文献すべてを取り扱うとした場合、雑誌や報告書の類まで膨大な数を扱うことになってしまうからである。なお、特別学級や特別支援学校で行われる読み聞かせを扱った研究は本稿では扱わない。

教育学研究という文脈で、学校という特定の状況における読み聞かせの研究を整理するために、本研究ではさらに限定した状況に着目することで分析の観点を規定することとする。それは読み聞かせが行われる時間である。つまり、研究の対象が授業内で行われる読み聞かせか、もしくは授業外で行われる読み聞かせかという観点を整理する。

3. 結果 — 研究の整理検討

3.1. 授業内での読み聞かせ

3.1.1. 国語科

玉瀬 (2012) は「国語教育の領域において、読み聞かせは主として低学年を対象とした読書指導の一つとして位置づけられ、読みの教育においてはこれまであまり重視されてきたとはいえ、研究対象となることも少なかった」(p. 21) と、国語教育について概観している。

確かに、読み聞かせは主として低学年を対象とした読書指導の一つとして位置づけられてきた(大川 1991, 平澤 1992)。それは今現在も否定されることはなく、人口に膾炙した考えである。読書指導の観点から見れば、足立 (2014) に見られるように、その方法は発展的な変容が試みられている。しかし、当時平澤 (1992) が「読み聞かせ」は、単に読書への興味づけという従来の固定的な指導目的にかぎらず、国語教育でねらいとする「国語の力」をさまざまな角度から身につけることに役立つのではないかと予想したように、近年はリテラシーの獲得を教育目的とする教育方法として、読み聞かせが用いられるという新たな展開を見て取ることができる。その展開は、研究の文脈において「授業実践の分析」と、「教材である絵本の分析」という二つの観点から検討されている。

授業実践の分析という観点では、那須 (2012) や伊崎 (2010, 2011) の研究を挙げることができる。那須 (2012) は、小学校 2 年生を対象に読み聞かせ単元を開発し、カルキンス (2010) の「考え聞かせ」の手法を取り入れた授業実践が読解方略を学ぶ上で有効であることを示した。伊崎 (2010, 2011) は小学 1 年生を対象に行われた授業の分析を通して、読み聞かせを取り入れた読解指導が PISA 型読解力の育成に効果的だと考察した。

一方で、教材である絵本の分析も行われている。この観点を検討する際には、2010 年に行われた全国大学国語教育学会ではじめて「絵本」をメインテーマに据えたパネル・ディスカッションが行われたことに触れておかなばならない。このパネル・ディスカッションは「絵本というメディアが、国語教育においていかなる可能性をもつものか学会に問うもの」(余郷, 2011, p. 3) で

あり、絵本という教材の国語教育上での位置と意義を確認し、提言するものであった。シンポジウムの内容と関連して本項でとくに扱わなければならないのは山元（2014）の研究である。山元はリテラシー教材としての絵本の価値をサイプやキーファーの所論を考察し論じている。山元は読解力を育成するための教材として、絵本の可能性を示した。

このように、国語科においては読解力や読解法略といった読みのリテラシーの獲得を目指して、実践の分析と教材である絵本の分析の観点から迫っていくという新たな展開が見て取れる。なお、ここまでの研究は主に小学生を対象とした研究であったが、中学生を対象とした実践を分析した田淵（2014）のような研究もあることにも付言しておきたい。

3.1.2. 英語科（外国語活動）

小学校において、外国語活動での読み聞かせ研究が近年増加している。これは2008年版の学習指導要領で外国語活動の必修化が明記されたことと大きく関係しており、その研究は、国語科と同じように授業実践の分析と絵本の分析という観点から検討されている。

まず、実践分析の観点では、小松・西垣（2007）やホール（2009）、松浦・伊藤（2012）の研究を挙げることができる。小松・西垣（2007）はシェアード・リーディングを取り入れた読み聞かせ単元を実施し、英語の語彙や表現が定着し、その効果が数ヶ月経っても減少しなかったことを明らかにした。ホール（2009）は、理解と興味を高めるために、授業実践の中で教師がどのような読み聞かせ方を活用しているか検討した。松浦・伊藤（2012）は、インプット型の必要性を説き、絵本を用いることが英語への理解、聞く力の向上、リスニングやリーディングへの興味関心をもたらすことを指摘した。

そして、絵本の分析という観点では、木戸（2014）を挙げることができる。木戸はフォニックス指導の問題点を指摘し、フォネミック・アウェアネス指導の重要性を説いたのち、フォネミック・アウェアネス指導に適した絵本の分析を行った。なお中学校においては、中学生が小学生に読み聞かせをすることで相互のコミュニケーション能力の育成を狙う山崎・菅野（2008）の研究がある。

このように、英語科においては興味、語彙、音韻理解、コミュニケーション能力などのリテラシーを獲得するための方法として、実践の分析や絵本の分析を中心に研究が行われている。

3.1.3. その他の教科

中学校家庭科において、保育体験実習の実践を通じた中学生の意識の変化を分析した鳥井他（2006）がある。保育体験実習の中で中学生が読み聞かせ実践をすることで、中学生の幼児への関心・好意が向上し、幼児と接することに意欲的になった一方で、依然として不安感を持っていること、絵本の読み聞かせに対する感想は肯定的な感想だけではないことを示した。その上で、保育体験実習の前に読み聞かせの方法を学ぶ活動を行うことの重要性を説いている。

3.1.4. 特別活動

特別活動では、河野（2011, 2013a, 2013b）の一連の研究を挙げることができる。河野の一連の研究は、小学校の特別活動においてメンタルヘルスの維持・向上や学級集団における安心感を見出すために、読み聞かせと合わせてフォーカシングやシェアリングといった一連の手法を用いた授業実践を実施・分析し、実践マニュアルを作成し、マニュアルを用いて河野以外の授業者でも実践を行うことができることを検証した¹⁰⁾。これらの研究は、読み聞かせを教育目的を達成するための教育方法として捉え、その開発・改善を検討している。

3.2. 授業外での読み聞かせ

読み聞かせは、授業内だけではなく、授業外でも行われている。授業外の読み聞かせでは、足立・高橋（2002）と城戸他（2012）の始業前の時間における読み聞かせを対象とした研究、漢那（1979）の放課後の時間における読み聞かせを対象とした研究がある。足立・高橋（2002）は、小学校六年生を対象に、読み聞かせボランティアが行う読み聞かせの効果を①読書意欲を育てる②集中力を育てる③語彙力を育てるものと仮説を立て検証した。その結果、読み聞かせは①児童にとって楽な活動であり読書意欲を育てていること、②集中力を育てているとはいえないこと、③児童の実感として新たなことばを覚えられる方法ではないことを明らかにした。

城戸他（2012）は、二つの小学校の小学二年生それぞれ二クラスを対象に、食知識と食態度について調査・比較検討した。介入群には絵本の読み聞かせを週一回行い、また絵本だよりの発行や食育に関する絵本を自由に読むことのできる環境を整備した結果、一方の小学校では食知識、食べる意欲、命について考える感謝の心の項目で、もう一方の小学校では食知識と食べる意欲および食意識の項目において、いくつかの望ましい変化が見られることを示した。

漢那（1979）は沖縄県の小学校一年生を対象に、絵本を一年間にわたって読み聞かせすることが読書力にどのような効果をおよぼすのか検証した。実験群と統制群それぞれ約30人に、毎週一回放課後に、保育学専攻生が絵本の読み聞かせを行った。実験の前後に「幼児・児童読書テスト」を行い、また実験開始の二ヶ月後に知能検査の非言語式テストを行った。実験の結果、読み聞かせが「語や文・文章の理解」において促進効果をおよぼすこと、知能指数の高いグループほど読書得点が高くなることが明らかになった。

3.3. 広く学校という状況を想定した読み聞かせ

ここまで読み聞かせを授業内と授業外という2つの場合に分けて整理・検討してきたが、このような分類にそのまま当てはめることができない研究もいくつかある。それは、研究の主な対象となる読み聞かせが、複数の授業で行われている場合や、授業内や授業外という枠組みにとらわれない教育活動として扱われている場合である。このよう研究は「広く学校という状況を想定した読み聞かせ」として整理・検討することとする。この分類では、松本（2013）、村山他（2012）、足立（2004）を挙げることができる。

松本（2013）は松本らによる一連の研究⁹をふまえて、教室における教師の読み聞かせが、どのような教育的意図の上で行われているかを物語論の立場から考察した。その結果、物語内容のレベル、物語言説のレベル、読み聞かせの場のレベルという三つのコミュニケーションレベルに応じて、教師の重層的な教育的意図のもとに、さまざまなストラテジーが選択されつつ実践がなされていると考察した。

村山他（2012）は、小学校の国語科または総合的な学習の時間における高齢者読み聞かせボランティアとの世代間交流が、中学校入学後の地域活動参加意識におよぼす長期的効果について検証した。結果、「交流授業体験」が「高齢者ボランティアとの親密さ」「絵本の読み聞かせへの関心」および「高齢者イメージ」を媒介として、中学入学後の「地域活動参加意識の向上」に影響していた。また、「性別」が「絵本の読み聞かせ関心」を媒介にして「地域活動参加意識」を規定していることを明らかにした。

足立（2004）は、2002年に読み聞かせボランティアの実態調査を分析し、当時の時点で、ここ5年ほどの間で読み聞かせボランティアが急激に増加したこと、しかしわずかながらやめたという学校も例もあること、読み聞かせボランティアの取り組み自体が新しいという時期は終わったことを示した。その上で、読書活動振興方策としてのボランティア研修に関する提言を行った。

4. 考察

以上の整理・検討を踏まえて考察を行う。本節では「学校における読み聞かせがどのように研究されてきたか」を明らかにする。まず、分析対象とした研究では国語科に限らず、英語科（外国語教育）、中学校家庭科、特別活動、総合的な学習の時間、始業前の時間、放課後、広く学校という状況と、多様な時間に行われる読み聞かせが研究の対象であった。学校における読み聞かせに着目したことで、国語教育に限らない研究の多様性を記述することができた。そして、本研究の対象の中には、大人から子どもへの読み聞かせだけではなく、中学生から小学生、中学生から幼稚園児への読み聞かせも見取ることができた（山崎・菅野 2008、鳥井他 2006など）。分析対象とした研究は多様な時間に行われ、様々な読み手によって行われる読み聞かせであった。このことは、読み聞かせが読書材と読み手、聞き手さえ存在すれば、いつでも、どこでも、だれでも行うことができるという簡便な方法であるということに起因しているだろう。

次に、これまで「①授業内での読み聞かせ②授業外での読み聞かせ③広く学校という状況を想定した読み聞かせ」に分けて検討をしてきたが、この分類をさらに区分することで、研究のタイプを示し考察する。これら3つの分類は、それぞれの研究目的やテーマ、その関心からさらに2つの研究タイプに分類することができる。それは、「(1) 教育方法開発・改善型」という研究タイプと、「(2) 読み聞かせ実態分析型」という研究タイプである。

(1) 教育方法開発・改善型

「①授業内での読み聞かせ」がこのタイプにあてはまる。ただし、「②授業外での読み聞かせ」

である城戸他（2012）もあてはまる。この研究タイプでは、読み聞かせを「ある教育目的（その多くはリテラシーの獲得）を達成するための教育方法」として捉え、「授業実践の分析」や「教材である絵本の分析」を通して「教育方法をいかに開発し、改善すべきか」を検討することが研究の関心になっている。

このタイプの研究を振り返ると、国語科や英語科（外国語活動）といった言語に関わる教科（教科外活動）でまとまった研究が行われていた。それら研究の展開をここでもう一度確認したい。国語科では読み聞かせが読書指導の一方法として広く受け入れられた上で、読解力や読解法略といったリテラシーを獲得するための教育方法として、授業実践や絵本の分析を通して開発・改善されてきた。英語科（外国語活動）では、小学校外国語活動の必修化に関わって読み聞かせ研究が増加し、興味、語彙、音韻理解、コミュニケーション能力などのリテラシーを獲得するための教育方法として、授業実践や絵本の分析を通して開発・改善されてきた。なお中学校家庭科や特別活動においては、保育体験学習の実施、メンタルヘルスの維持・向上や学級集団における安心感の醸成を教育目的として、それを達成するための教育方法として授業実践の分析を通して開発・改善されてきた。

（2）読み聞かせ実態分析型

「②授業外での読み聞かせ」「③広く学校という状況を想定した読み聞かせ」の研究がこのタイプにあてはまる。このタイプの研究は、（1）教育方法開発・改善型とは大きく異なり、「読み聞かせという教育方法をいかに開発し、改善すべきか」を検討することが研究の関心ではない。「学校において、読み聞かせはどのように行われているか、どのような効果があるか」という読み聞かせの実態それ自体を明らかにすることが研究の関心になっている⁴⁰。松本（2013）、足立（2004）はどのように行われているかという実態を明らかにし、足立・高橋（2002）、漢那（1979）、村山他（2012）はどのような効果があるかという実態を明らかにしている。

さらに、2つの研究タイプの関係を問い直したい。各タイプを量的観点から見ると、（1）教育方法開発・改善型に比べ、（2）読み聞かせ実態分析型の研究は少ない。そして、質的観点からみると、（1）教育方法開発・改善型はそれぞれの研究が関連し、各教科や教科外活動での主たる研究の観点が存在するのに対し、（2）読み聞かせ実態分析型は研究の観点が多様であり散発的である。

最後にこれまでの考察を踏まえて提言を行う。本研究では現場での実践や報告を対象とせず、学術誌に掲載された研究、あるいはそれを基とした学術書を対象に検討を行った。その結果、読み聞かせ研究は授業内での読み聞かせを対象とした教育方法開発・改善型の研究で多く行われていることが明らかになった。

しかし、現場での実践や報告に目を移すと、読み聞かせは学校において始業前の時間、つまり授業外の時間で頻繁に行われている。その時間には、多くの学校で読み聞かせボランティアや教

師が読み手となり、聞き手である児童や生徒に対して読み聞かせを行っている。そのような活動は文部科学省H P「子ども読書の情報館」や全国学校図書館協議会『学校図書館』、いくつかの書籍に見られるように豊かで多様な活動として報告されている。しかしながら、このような活動の実態を、読み聞かせ実態分析型の研究は捉えきれてはいない。それは量的にも少ないし、質的にも多様ではあるが散発的であって、十分に実態を捉えきれてはいない。読み聞かせ実態分析型の研究では、豊かに行われている授業外での読み聞かせの実態を捉え、それを描き出すことが必要であろう。

5. 参考・引用文献

- 足立幸子・高橋景子（2002）「学校における読み聞かせについての考察」『山形大学教育実践研究』第11巻，pp. 69-76.
- 足立幸子（2004）「地域・過程と学校の連携を通した子どもの読書活動振興方策—読みきかせボランティアの全国実態調査の分析から—」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』第4号，pp. 41-53.
- 足立幸子（2014）「交流型読み聞かせ」『新潟大学教育学部研究紀要』第7巻，第1号，pp. 1-13.
- 伊崎一夫（2010）「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究」『環太平洋大学研究紀要』第3巻，pp. 43-50.
- 伊崎一夫（2011）「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究（2）—「つなぐ思考」の活性化—」『環太平洋大学紀要』第4巻，pp. 65-71.
- 大川由里子（1991）「読書指導における「読み聞かせ」の現状とその展望」筑波大学『国語指導研究』第4巻，pp. 35-43.
- 河野俊明（2011）「小学校授業におけるフォーカシングやシェアリングを取り入れた絵本の読み聞かせ活動の開発」『読書科学』第53巻，第4号，pp. 123-141.
- 河野俊明（2013a）「小学校授業におけるフォーカシングやシェアリングを取り入れた絵本の読み聞かせ活動の開発（Ⅱ）—集団フォーカシング効果の検証—」『読書科学』第55巻，第1・2号合併号，pp. 13-23.
- 河野俊明（2013b）「小学校授業におけるフォーカシングやシェアリングを取り入れた絵本の読み聞かせ活動の開発（Ⅲ）—実験授業（RFSMⅠ）マニュアル化の検証—」『読書科学』第55巻，第3号，pp. 69-77.
- 漢那憲治（1979）「読み聞かせの効果（Ⅰ）—読書力におよぼす読み聞かせの効果についての一考察—」『読書科学』第22巻，第4号，pp. 95-103.
- 城戸杏奈・高村仁知・上田由喜子（2012）「小学2年生に対する絵本を用いた食育の有効性—食知識と食態度に着目して—」『栄養学雑誌』第70巻，第4号，pp. 236-243.
- 木戸美幸（2014）「絵本の「読み聞かせ」を使った小学校英語入門期における phonemic awareness 指導」日本比較文化学会『比較文化研究』第110号，pp. 21-31.

- 小松幸子・西垣知佳子 (2007) 「インタラクシオンを促す英語絵本の読み聞かせとその効果」(小学校英語教育学会)『小学校英語教育学会紀要』第8号, pp. 53-60.
- ジェームズ M. ホール (2009) 「小学生の理解と興味を高める英語絵本の効果的な読み聞かせ方」日本教材学会『教材学研究』第20巻, pp. 59-67.
- 田淵由起子 (2009) 「谷木由利中学校国語科実践の研究—国語科における「絵本の読み聞かせ実践」の分析を中心に—」鳴門教育大学国語教育学会『語文と教育』第22号, pp.(1)-(14).
- 玉瀬友美 (2012) 『「保育」の教育における読み聞かせ経験—その教育心理学的研究—』風間書房
- 鳥井葉子・岩瀬明恵・丸山智美・北島康雄 (2006) 「中学校家庭科における保育体験学習の考察—リサイクルおもちゃの制作と絵本の読み聞かせを通して—」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』第21巻, pp. 153-161.
- 那須利佳子 (2012) 「読み方を学ぶ読み聞かせの単元開発」『山形大学大学院教育実践研究科年報』第3号, pp. 132-139.
- 西尾実 (1956) 「国語教育」西尾実・倉沢栄吉・滑川道夫・飛田多喜雄・増淵恒吉編『国語教育辞典』朝倉書店.
- 平澤真美 (1992) 「国語科における読書指導法の研究—「読み聞かせ」を中心に—」『信大国語教育』第2巻, pp. 53-63.
- 松浦友里・伊藤英 (2012) 「小学校外国語活動における英語絵本の導入効果に関する実践研究—第二言語習得研究におけるインプット理論の視点から—」『岐阜大学カリキュラム開発研究』第29巻, 第1号, pp. 94-101.
- 松本修 (2004) 「読み語りの実践における語り方の構造」『読書科学』第48巻, 第4号, pp. 123-133.
- 松本修 (2006) 「読み語りにおけるオーディエンスの特性と読み語りのモード—読み手とオーディエンスの相互作用に着目して—」GroupeBrcolage『GroupeBricolage 紀要』第24号, pp. 11-22.
- 松本修 (2007) 「読み語りにおけるオーディエンスの特性と読み語りのモード—読み手の方略に着目して—」『読書科学』第51巻, 第1号, pp. 35-43.
- 松本修 (2008a) 「読み語りにおけるオーディエンスの特性と読み語りのモード—読み手とオーディエンスのラポールに着目して—」『臨床教科教育学会誌』第8巻, 第2号, pp. 11-20.
- 松本修 (2008b) 「読み語りにおける読み手の方略」GroupeBrcolage『GroupeBricolage 紀要』第26号, pp. 8-20.
- 松本修 (2013) 「教室における読み聞かせの役割」『読書科学』第55巻, 第1・2号合併号, pp. 24-31.
- 村山陽・安永正史・大場宏美他 (2012) 「小学生時の世代間交流が中学入学後の地域交流参加意識におよぼす影響—絵本の読み聞かせ高齢者ボランティア REPRINTS の実践報告から—」日本老年社会科学会『老年社会学』第34巻, 第3号, pp. 382-398.

山崎友子・菅野弘 (2008) 「Participatory Approach の試みに向けて—附属中学校生による小学生への英語の絵本の読み聞かせの実験的授業 (1)—」 岩手大学教育学部英語教育科『岩手大学英語教育論集』第10号, pp. 43-48.

山元隆春 (2014) 『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』 溪水社.

余郷裕次 (2011) 「コーディネーターのまとめ」『国語科教育』第69巻, 第3-4号, pp. 3-4.

ルーシー・カルキンス (吉田新一朗・小坂敦子編訳) (2010) 『リーディング・ワークショップ—「読む」ことが好きになる教え方・学び方』 新評論.

注

- (1) 国語教育とは、「国民が国語によって社会生活を営み、国民文化を創造する能力を育成し、進んでその国語そのものを向上させるための学習とその指導」を指す。「国語教育には広い意味と狭い意味とのふたとおりある」が、玉瀬が対象としたのは「学校で行われる教育の一部として、意図的・計画的・方法的に行われる国語の学習とその指導を指す、狭い意味の国語教育」であるといえる (西尾, 1956, p. 241-242)。
- (2) ただし、河野は総合的な学習の時間も想定に置いて実践マニュアルを作成した。
- (3) 松本 (2004), 松本 (2006), 松本 (2007), 松本 (2008a), 松本 (2008b)
- (4) ただし、足立 (2004) では、実態を問いなおした上での読書振興方策の提言も研究の関心となっている。